

http://fukushimafolklore.jimdo.com/fukushima_folklore1971@yahoo.co.jp

令和元年度 総会報告

日時：令和元年6月2日（日）13：30～14：30

場所：郡山市中央公民館 2階 第2講義室

令和元年度福島県民俗学会大会は、郡山市中央公民館を会場に午前中に研究発表会、午後に総会・公開講演会が開催された。総会では以下の内容が報告、承認された。

■会員異動について

平成30年度中に4名の新入会者があり、退会者はいなかった。令和元年6月2日現在の会員数は74名。

■決算・事業報告ならびに予算・事業計画

事務局より平成30年度の決算と事業報告を行い、会計監査より適正な支出であったことが報告されて満場一致で承認された。また合わせて令和元年度の予算案ならびに事業計画についても満場一致で承認された。今年度の事業計画は下表の通り。

令和元年度事業計画

日	事業名	場所
31.04.27	第1回幹事会	郡山市労働福祉会館
元.06.02	令和元年度大会（総会・講演会・研究発表会）	郡山市中央公民館
元.08	『ふおーらむ・F』No.10発行	
元.10	地域持ち回り研究会（会津） 第2回幹事会	福島県立博物館
元.11.16	第36回東北地方民俗学合同研究会	仙台市内
02.01	『ふおーらむ・F』No.11発行	
02.03.31	『福島の民俗』第48号刊行	

■学会創立50周年記念事業について

①記念書籍の刊行

一般向けに福島県の民俗文化を分かりやすく解説した書籍『民俗で読み解くふくしまの暮らし』（仮題）を歴史春秋社より刊行予定。

②記念イベント

地域持ち回り研究会を記念シンポジウムとして開催。日程は創立記念日である2021年2月7日（日）で検討中。

③会誌特集号

『福島の民俗』50号（2021年度発行）を記念特集号として記念シンポジウムの記録を掲載するなど、通常とは異なる誌面構成とする。（事務局 内山大介）

令和元年度公開講演会報告

日時：令和元年6月2日（日）14：30～16：00

演題：「初市・互市・定期市—南東北の市と商人—」

講師：山本志乃氏（旅の文化研究所 研究主幹）

山本志乃先生は、商いの場としての「市」を長く研究され、つい先日も『「市」に立つ—定期市の民俗誌』（2019年4月、創元社）を著された。特に定期市や行商に携わる人たちの生活誌、庶民の信仰の旅、女性の旅などについて多くのご著書を精力的に出されており、民俗学における「市」研究の第一人者である。午前中の大山氏の発表とも相まって、参加者一同、交易や市に関わる商人たちの民俗について理解を深めることができ、有意義なひと時となった。

先生は今回のご講演のため、とくに「福島県と市」「山口弥一郎の市研究」についても詳しくご紹介くださった。当会事務局のある福島県立博物館では「山口弥一郎調査資料の研究」を継続中で、さっそくその成果をご利用いただいたことは関わっている我々にとっても大変光栄の至りだった。

ご講演は商いの原点としての市（イチ）やその語源・分類から始まり、福島県内の定期市と山口弥一郎による市研究の紹介、宮城県仙北地域の「互市（たがいち）」、市を巡る商人の生活誌に至るまで多岐にわたった。

福島県内の市について、先生は山口弥一郎の著書や『福島県史』所収の三春の文書資料などから、福島県内の定期市について概観を示された。福島県内でも、現在まで初市・だるま市・お日市などが盛んに行われているが、馬市や農具市・苗市、また福島県の一産業だった養蚕に関わって繭市・生糸市・絹市などがかつては多く見られたという。とくに掛田



山本志乃先生のご講演

の生糸市や相馬中村の野菜市などが賑わっていたという。

「互市」の語は私などは耳慣れなかったが、宮城県の仙北では一般的に使われる語といい、山口弥一郎もかつて互市の主な開催地についてまとめていた。その由来についてはさまざまだが、近世後期の古文書には「高市（たかいち）」として登場し、多くは寺社の祭礼と定期市を組み合わせた形であること、また住民たち主導で地域の活性化を企図して企画・実行されてきたことが説かれた。互市の語は物々交換・相互扶助・助け合いをイメージさせる。山本先生が「互市」の語を初めて耳にしたのは気仙沼の地だったというが、それも「不況で勢いをなくした地域を活性化させるために互市を開いた」という話で、その本質をいみじくも示していた。

終盤は市を巡る商人の生活誌である。宮城県の女川に生き、50年以上も各地の市を回ってきた「コンプヤさん夫妻」の商圏は、宮城県内一帯から山形・福島・北関東にまで及ぶ。山本先生はこの夫妻の出店する市を追って1年以上にわたって市通いを続けた。その調査は先生自身も「目から鱗が落ちた」と述べるほどで、まとめて示された「共に生きる場としての市」の姿など、市研究にとって貴重な示唆に富んでいる。

市日にふさわしい「晴れ女」だと自他共に認める山本先生の、精力的で目の詰んだフィールドワークに裏付けられた市のお話は非常に深みがあり、聴衆に民俗調査や民俗学の面白さをも伝えるものだった。(事務局 大里正樹)

研究発表会報告

日時：令和元年6月2日（日）10：30～12：00

午後の総会、公開講演会に先立って行われた研究発表会では、会員2名の方のご発表があった。

① 大山孝正氏「福島県の馬喰（ばくろう）」

大山氏は交通・交易に関わる民俗として、馬喰（ばくろう）と呼ばれる馬や牛を扱う家畜商について長く研究されてきた。「ばくろう」の本来の語義は、取り替えること、交換することであり、動詞として「ばくろ」と使われることもあるという。すなわち、馬喰（ばくろう）とは単に家畜商の意味のみならず、まさに交換、交易と密接に関係する言葉なのだ。馬喰を交易の民俗学的研究の中で位置づける必要がある、という大山氏の問題意識は学生時代から続いている。

農耕用家畜はおおむね西日本が牛、東日本が馬という傾向がある。福島県は近世以来の「白河馬市」など馬産地として知られ、馬を扱う馬喰も多くいた。

今回の発表は大山氏が福島県内の馬喰について調べてきた成果である。はじめに「ばくろう」という言葉から説き起こし、「馬喰の地位と役割～白河馬市とその周辺～」、「馬喰から家畜商へ～家畜流通と農畜産業の近代化の中で～」、「福島県における家畜商の現状と、失われた『馬喰の民俗』」の項目で、豊富な資料や写真を踏まえて発表された。

印象的だったのは、福島県における家畜商の現状についてである。馬喰の商いをルーツにもつ矢吹家畜市場や、石川町・富岡町などの市場がいずれも震災後に閉鎖され組合も解散、現在は本宮市の家畜市場を残すのみとなったという話で、震

災と原発事故の影響がここにも大きく及んでいることが痛感された。さらには「馬喰の民俗」も今ではその多くが失われている。とはいえ大山氏の発表でその符牒や商慣行が紹介され、多様な馬喰の民俗の一端を知ることができた。

発表は馬喰や馬市の歴史、近代～現代の変遷、原発事故の影響と現代的課題まで、広範囲に及んだ。最後には馬喰研究の展開や、「民俗文化における関係性、価値の問題にどう切り込めるか」という大きなテーマも示され、研究の大きな拡がりを感じさせるものであった。

② 渡部恵一氏「昭和から平成へ

—子どもの頃の記録を読む—

渡部恵一氏は「史料」としての個人記録という興味関心から、ご自身が小学生時代に書いた絵日記を分析した成果を報告した。一見異色の研究対象のようだが、まず冒頭に『原町市史』などでの近現代の日記等を活用した先行例を紹介するとともに、自身の「養兎」研究での気付きなどから、より深層に迫るための研究対象として女性や子どもによる記録がもつ重要性を説いた。

今回紹介したのは発表者自身が小学校3～5年だった頃（昭和63年～平成2年）の記録である。日記そのものも、日常の小さな出来事から世間を揺るがせた大ニュースまで多岐におよんでいる。

また、発表者は当時、春休みは南相馬市の母の実家で、冬休みは会津の父の実家で過ごしたという環境にあり、当時から浜通りと会津の地域差、昔の暮らしと今の暮らしという時代差にも興味があったようだ。「春休みいなかの物きろく」と題して、南相馬の実家の写真を撮ったり、その間取りなどを書き写しており、当時の暮らしの姿を切り取っている。

そして日記に関しては、やはり昭和64年1月7日の昭和天皇の崩御、平成への改元、と慌ただしく揺れ動く世間の様子が、当時の渡部少年に鮮烈な印象を残したようだ。1月7日の絵日記に、渡部少年は「平成」の額を掲げる小淵官房長官（当時）の絵を描いた。今まさに令和時代に入ったばかりのタイムリーな時期に、やはり昭和から平成へと改元された当時の日記を題材とし、当時の一個人（発表者）がどのような感慨を持ち、何を書き残そうとしたのか、ユーモアあふれる語り口のお話には、興味は尽きなかった。(事務局 大里正樹)

Announce 研究会のお知らせ

◆ 令和元年度 地域持ち回り研究会（会津）

【日 時】10月20日（日）13:30～16:00

【会 場】福島県立博物館

【内 容】新・民俗部門展示室見学と山口弥一郎調査資料についての紹介

◆ 第36回 東北地方民俗学合同研究会

【日 時】11月16日（土）13:00～16:45

【場 所】スマイルホテル仙台国分町 2階会議室

【テーマ】女性の民俗（仮）

※会員のみなさまには、いずれも詳細が決まり次第ご連絡いたします。

note
から

広野町指定文化財「太田農神社本殿彫刻」について



【写真1】馬を引いて代掻きをする人



【写真2】田植えをする人と苗を投げ渡す人



【写真3】片隅にはタバコをふかす人も

広野町指定文化財「太田農神社」本殿の外壁3面と正面両飾り袖は、見事な木彫で飾られている。彫刻は、名匠と呼ばれた後藤縫之助の高弟三代目後藤政秀で、明治10年の本殿再建に際して彫られたものとされる。

飾り袖も見事な作品であるが、目を引くのは本殿外壁3面である。それぞれ「春」「夏」「秋」の農作業（稲作）の風景が刻まれており、近世後期から明治にかけて行われていたであろう農作業の様子を伝える。人物の表情は豊かで、今にも動き出しそうだ。現在は木肌があらわになっている状態だが、女性の腰巻らしい赤や、苗の緑などに色が残っており、当時は彩色されていたものらしい。

「春」は、枝を広げた満開の桜の下での種まきと水口まつり、「夏」は活気ある田植え、そして「秋」はさまざまな農具を使っでの収穫の様子が描かれている。ここでは紙面の都合上、「夏」の田植えの様子について紹介したい。

【写真1】中央には、馬で代掻きをする人がいる。馬の鼻どりをしている人もいるが、馬はなかなか前に進んでくれないようだ。

【写真2】一方、苗代から田植えをしている女たちに向けて、苗を投げようとしている人がいる。彼が「いくぞー！」とでも声をかけたのだろう、一列に並んで田植えをしている女性のうちの一人が気がついて、男性の方を振り向いた。田植えの列の先頭では、立ち上がって興がのったように歌っている女性もいる。

【写真3】みんなが忙しく立ち働くなか、ちゃっかり腰を下ろしてタバコを一服している男性もいる。

※本殿は鞘堂のなかに納められているので、彫刻を見ることはできません。

(会員 丹野香須美)

展示紹介

いわき市暮らしの伝承郷 企画展「いわきの郷土料理」

いわき市暮らしの伝承郷では、7月13日より企画展「いわきの郷土料理」を開催している。広域ないわき市は、東側は太平洋、西側は阿武隈高地に接しており、同じ市内に住んでいても、地域によって気候や採れる食材が異なる。そのため日々の暮らしの中で作り、食べ、伝承されてきた料理にも自ずと違いがみられる。企画展では、約50品の料理について、季節毎に作られるものと、一年を通して作られるものとに分けて写真で紹介している。単に料理の写真だけでなく、作り方や食材についての説明文も付した。また、食に関するものを中心に45点の民俗資料も展示している。

さらに、屋外の民家ゾーンにある畑では、いわき市の伝統野菜である十六ささげや小白井きゅうりの他、茄子や獅子唐、とうもろこし等の野菜を栽培し、生育状況を自由に見ることができる。会期中には、この野菜を使った郷土料理「十六ささげのよごし」と茄子汁の振る舞いや野菜収穫体験、郷土料理（鰹の焼き浸し・あら汁）教室などを開催し、多角的な展示を目指した。

展示の準備過程で、市内のご婦人方に料理を作っていたり、貝焼きの加工作業を取材させていただいたり、年配

の方々には話を伺うなどした。紹介した料理は、筆者も幼い頃から食べてきた身近なものもある一方、食べたことがなかったものもある。ただし市内の郷土料理を全て網羅できてはならず、観覧者に「我が家の郷土料理」についての情報提供を呼びかけている。

今日はインターネットでさまざまな料理のレシピを見て作ることができ、筆者も利用している。そこに、地元ならではの料理も取り入れることで、毎日の食卓がより豊かなものになって欲しい。個人的に、若い世代に見ていただきたいと考えている。(会員 渡邊彩)

【会期】 令和元年7月13日(土)～9月29日(日)

【会場】 いわき市暮らしの伝承郷

いわき市中央台 県営いわき公園内 tel 0246-29-2230



(左) のっぺい汁 (右) 焼き浸し

コラム Column 二本松の太鼓台と渡辺右近

彫刻師渡辺右近は大平村（現二本松市大平）木ノ崎7番地の仏師の家に生まれ、大正10年に二本松町の松岡町太鼓台の造り替えを双子の兄の渡辺左近と請け負いました。筆者の暮らす松岡で現在も曳かれている太鼓台がそれです。

先代の松岡町太鼓台は南に5km程離れた陸羽街道杉田宿に売られ曳かれたそうですが現存せず、言い伝えだけが残っています。二本松城下の現在の太鼓台の大きさは俗にいう「五尺の七尺」（幅五尺×奥行七尺）ですが、周辺地域には、二本松市旧岩代町小浜の塩野松神社太鼓台のように幅・奥行きとも15cm狭いものが多く残っています。他に、先代の本宮市北町太鼓台（これが古文書に残る文政2年のものと筆者は推察します。地元の伝承では今のものより小さく、以前はみずいろ公園近くの旧家にあったそうです）、二本松市旧東和町の太田若宮の太鼓台、同針道字町の太鼓台が同じ大きさと思われる。本宮市北町太鼓台は古文書にある文政2年の二本松と同時期とみられ、近在では二本松の一回り小さな時代（文政2年型）のものを買い取って曳いたのかもしれませんが。

古文書には「桜馬場」（現在のほんまつ保育園の所）で殿様の御覧を受けるため祭礼の行列が旧二本松城の竹田御門から入ったとあり、一回り小さな太鼓台が竹田御門に入れる限界の大きさだったと筆者は推察しますが、二本松駅前の大衆旅館の玄関に飾られた旧根崎町太鼓台の欄間彫刻や、玉ノ井2区太鼓台（明治38年に二本松の若宮町で太鼓台を新調した際、玉ノ井2区が古い太鼓台を買い取り、平成5年まで曳いていた）は文政2年型より大きく、古い太鼓台の全てが今より小さかったのか、まだ結論は出ていません。

本会会員の喜古康浩氏所蔵の絵葉書などで先代の松岡町太鼓台を見ることは可能で、それは今の大きさに造り替えた後の他の5台より一回り小さいです。古くは松岡と本町との2町内のみ飯盛女もいて、「駅」もあったといえます（街道から筆者宅への入り口の喫茶店の場所）。当時の城下町の太鼓台6台のうち、5町では太鼓台を明治期に造り替えたのに、松岡町では軒数が少なかったからか造り替えたのが大正10年と一番遅く、太鼓台全体に彫刻を施すことが一度には出来ませんでした。欄間と墓股のみ「箴（おさ）欄間」仕上げだったため、小若たちは他の町内から「のんのさまのていごでえ（仏壇の太鼓台＝箴欄間が仏壇の内側の扉に似ている）」と馬鹿にされたと聞いています。松岡町太鼓台と、松岡より少し早く彫刻が完成した亀谷町太鼓台以外、他の町の4台はすべて当初より彫刻欄間に造り替えたそうです。

さて、渡辺右近は「会津のお寺に婿に行き坊様になった」という言い伝えがあるがよくわからない、と本会副会長の小沢弘道氏に話したところ、『会津坂下町史 民俗編』に「彫刻師渡辺右近」として寺の娘と結婚したことや会津での作品

についての記述があると教えて下さりました。今、右近の会津坂下町に残る彫刻は光明寺太子堂、光照寺本堂欄間などがあります。筆者は平成30年に会津坂下の祭り屋台を見ましたが、後でそのうちの4台の彫刻が右近の彫刻だという事を町史で知りました。見学時にそのような見方をしていなかったのが残念です。なお、どこの彫刻を彫ったかの正確なことは町史及び『続文化人の横顔』の方が詳しいのでそちらをご覧下さい。貴徳寺にある渡辺右近の墓を筆者が訪ねたとき、駐車場がわからず、本来でない所に車を止めたところ、住職が案内してくれた右近のお墓はその脇で、さすが寺の娘を嫁にしたからか良い戒名でした。

二本松市旧大平村の彫刻師集団は、二本松市本町の光明堂の渡辺幸十郎が祖といわれ、その弟子たちの系図は拙論「福島県内の祭礼囃子の源流その12」（『福島の民俗』38号）の57頁にまとめました。『会津坂下町史』には渡辺右近の父が「後藤流」の彫刻師だったと記されています。一方で、白沢ふれあい文化ホール（本宮市旧白沢村）にある「橘今朝二の獅子頭彫刻」の解説文には「大隅流」と書いてあり（『福島の民俗』38号、61頁）、渡辺幸十郎を祖とする彫刻師集団の中でも記述が異なります。筆者の調査当時（2009年頃）、本宮二本松で現役だった彫刻師にどこの流派かを尋ねましたが、全員が「わからない」という答えでした。これから又謎解きが始まります。（会員 相原達郎）



（行店向木・佐） 門迎奉及臺鼓太町全松本二
絵葉書『二本松全町太鼓台及奉迎門』喜古康浩氏所蔵
（※明治41年か、奥から2台目に松岡町太鼓台がある）



▼令和最初の『ふおらむ・F』は、記念すべき第10号となりました。▼皆さまのご寄稿で成り立つ本誌、あらためてご協力に感謝申し上げます。▼新入会員の自己紹介、見学記録、情報交換等々、ご寄稿はどうぞお気軽に。▼今後ともごひいきのほどを。（里）

- 福島県民俗学会通信誌『ふおらむ・F』第10号
- 2019（令和元）年9月18日発行
- 編集・発行 福島県民俗学会（会長 佐々木長生）
- 福島県会津若松市城東町1-25 福島県立博物館内
- 事務局：内山大介・大里正樹・山口祐
- 編集担当：大里正樹